

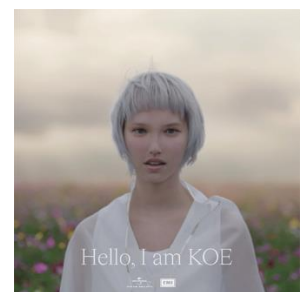


大事な思い出のあの場所と関係していなかったら、おそらくこの映画『百花』を見に行くことがなかったでしょう。横浜港南台教会は、会員にご自宅を解放していただいて、その地区の方々のために聖書を学ぶ集会を開いています。どこも大事な思い出の場所です。その家庭集会のお宅が映画『百花』の主人公の家のモデルとして、ロケーションされたのです。さらに、教会の2階ホールをスタッフの控室として利用していただいたと聞いています。

その場所は教会に一番近い洋光台家庭集会のレイ子さんのお宅です。彼女のお家に行くと玄関に入ってすぐに広いリビングがあり、大きなガラス窓から、広い美しいお庭が一望できるので、集まる人々はまずお庭に目を奪われてしまいます。ガーデニングが見事で、緑の芝生には雑草はなく、あちこちに四季折々、可憐な花が咲いていて、夢見心地になります。花から種を取って苗を育てているポットの棚もあり、本格的なガーデニング作業をされていました。花の名前を教えて頂きました。庭の向こうにはお隣の家の屋根が見え、その向こうに洋光台団地の建物が遠望できます。解放感溢れるお庭を眺めながら、聖書の言葉に耳を傾けたのです。

映画『百花』の作家・監督はレイ子さんのお宅を見て、とても気に入り、細部にわたって寸法通りにセットも造ったということでした。それはそうでしょう。レイ子さんは「友の会」の古参のメンバーであり、お部屋は手作り感の溢れる家具があり、手の込んだ手芸のインテリア、無駄のない、使い勝手のいい台所など、居心地のいい、楽しい雰囲気です。

映画はシングルマザーのピアノ教師の母と、その母にわだかまりや溝を感じている一人息子の話です。その母がアルツハイマーを発症したことが分かります。アルツハイマーになった人の意識、認識はこのようではないかと思えるような映像が続き、物語は進んでいきます。彼女の弾く「トロイメライ」の音が次第に外れていき、終わりがみえないなど、意識、記憶の混濁が続きます。過去と現在も交錯します。すこし分かりにくいような感じはありますが、会社員の息子が制作担当しているリアルな感じのヴァーチャル・キャラクター(上)が出てくることで、現実との乖離性と類似性を印象付けるような感じもあります。息子は母に抵抗感があり、言葉足らずでブッキラ棒な対応しかできないものの、母の生活を手当てしていきます。母の知られたくない過去、消えていく記憶に息子は向き合っていきます。最後に、母の記憶の言葉の意味を息子は知るのです。この映画は24日にスペイン映画祭コンペティション部門で監督賞を受賞しました。



映画の家では、レイ子さんのお家の美しさは描かれていませんでした。けれども間取りなどのセットは同じようでしたし、窓から見える外の様子も同じようで、とても懐かしかったです。最もロケーションとして大事だったのは庭からみえる団地の上の空だったかもしれません。

映画のように、私にも一人息子がいて、彼が老いの親を手当する日も近いかもしれません。また、アルツハイマーになった友人たちがいて、この病気を受け入れながら、交遊も大事にしなくてはいけないと思わされます。とても興味深い部分を示唆する映画でした。